

鼎談「図書館の現状と改革の課題—図書館職員の地位向上をめざして—」

発言要旨

図書館と地域をむすぶ協議会代表 太田 剛

2012年から本格的に図書館に関わり、その最初が幕別町図書館（北海道）だ。その中で、奇妙な事に気がついた。マークと呼ばれる蔵書管理の書誌データが、東京の専門業者が提供するもので、かなり高額であり、それが図書館の資料購入費を圧迫していること。図書館のすぐ近所に書店がありながら、同じ東京の専門業者に本を発注し、同じ業者から直接納入されていること。ところがお金の動きは地元の書店組合を介していて、さらに驚いた事は、司書が選書をせず、業者が選んだ本が送られるサービスがあること。

その後、地元書店に話を聞き、図書館界の事情を調べるうちに、マークと連動した蔵書管理システムが地元書店のハードルとなっていることや、装備を無償にする慣習の負担が大きいこと、書店組合は何もせず、実際は専門業者への名義貸しで、その対価として5%だけ支払われていること、出版界にバックマージンの慣習があることなどを知った。そこで、高額なマークを変更し、装備を福祉施設（就労継続支援B型）にお願いすることで、書店の負担を減らし、東京資本に吸い取られていた予算を、地元に戻元する小さな循環モデルを構築した。これが今、「幕別モデル」として全国に波及してきている。

そのような現場での改革を全国で展開するのと並行して、文字活字文化推進機構との出会いにより、活字文化議員連盟「全国書誌情報の利活用に関する勉強会」に参加し、国立国会図書館の無償マークの普及活動や実証実験を行った。

また「公共図書館プロジェクト」事務局長として2019年6月に「公共図書館の将来～新しい公共の実現めざす」を答申、マークから本の納入、指定管理の1本化が地元書店の排斥につながる問題や、官製ワーキングプアの象徴といわれる図書館職員の待遇問題などを指摘した。さらに、2023年6月には活字文化議員連盟と学校図書館議員連盟の合同会議に要望書を提出し、とくに図書館職員の待遇問題にフォーカスし、その場でそれぞれ議員連盟の議決とされた。その流れの中での今回のシンポジウムの開催だと認識している。